
水面に映る空は青く

さら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水面に映る空は青く

【Nコード】

N4548BA

【作者名】

さら

【あらすじ】

僕らが生まれたあの町は、大きな川が流れているだけの、本当になんにもない町だった。そんな田舎町で暮らす、幼なじみの真尋・朱里・蒼太。いつも一緒だった彼らに起きた、ある夏の悲しい出来事。それぞれの想いを胸に抱きながら、三人は少しずつ大人になっていく。

僕らが生まれたあの町は、緑が生い茂る山々と大きな川が流れているだけの、本当になんにもない町だった。

中学高校時代、水泳部だった僕の思い出といえば、学校のプールの匂いや眩しい太陽。それから水しぶきを上げながら泳ぐ、あの子の姿。

将来のことなんか考えられなくて、僕たちはただ今だけを生きていた。生きる意味さえもよくわからずに、ゆらゆらと水の中を泳ぐように……ただ今だけを生きていた。

「真尋まひろ！ ごめんね、遅くなって」

橙色の空の下、高校の校門前で待っていた僕に、朱里あかりが駆け寄ってきた。

「更衣室出ようとしたら、美穂ちゃんに声かけられちゃって」

そう言って朱里は僕の隣に並び、にこっと微笑む。

「いいよ、別に」

「じゃ、帰ろ」

どちらともなく一步を踏み出し、僕たちは並んで歩く。朱里のショートカットの黒髪は、まだしつとりと濡れている。

朱里は僕の幼なじみだ。と言っても、この小さな町では、小中高とずっと同じ学校に通うやつが大勢いる。つまりクラスメイトのほとんども、幼なじみのようなものだ。

だけど朱里とは、特に家が近かったせいか、本当の兄弟のように育った。

夏休みになるとお互いの家で宿題をし、川で遊んで、昼寝をして……お風呂だっ一緒に入ったことがある。

だから、僕たちはあまりにも近すぎて……朱里は僕の気持ちになんか、気づきもしないのだろう。

「もうすぐ大会だね？」

朱里が大きな目をくりくりさせて、斜め下から僕のことをのぞきこむ。小柄な朱里と、背丈だけはひよろひよろと伸びている僕の身長差は、三十センチ近くあるだろうか。

「あたしはダメだけど、真尋はまた選手に選ばれるね？」

「ダメとかいうなよ。朱里、最近タイム伸びてるだろ？」

「ダメダメ、全然。あたしなんか」

「おれだって……今年はきつと無理だよ」

ふたりの間に、微妙な空気が流れる。土手の上を歩く僕たちの脇を、自転車に乗ったおじさんがのんびりと追い越していく。

そうなんだ。高二になって、僕は思うように泳げなくなった。タイムは伸びないし、今年は大会にも出られないかもしれない。

僕はもう 自分の中にあつた大きな目標を、失ってしまったから。

「あ、あのさ」

話題をそらすように、朱里が明るい声で言った。

「真尋、最近、蒼太そつたに会った？」

「……いや」

朱里の口から出た男の名前に、一瞬胸がざわつく。

「なんで？」

「うん……最近、蒼太、学校に来ないから」

「どうせ、さぼってるんだろ？」

蒼太も朱里と同じくらい、長い付き合いの幼なじみだ。朱里が僕と同じように、蒼太のことを大切に思っているのも知っている。

だけど……朱里が蒼太の名前を口にするたび、僕はなんともいえない複雑な気持ちになるんだ。

「でもね、家にも帰ってないみたいだし」

「蒼太んちに行ったのか？」

「だって、心配でしょ？」

「ほっとけよ。もう子供じゃないんだから」

朱里が黙り込む。僕は小さく息を吐く。

蒼太の家は昔から、悪い意味で目立っていた。

仕事もしないで昼間から飲み歩いている父親。そんな父親の目を盗んで、男を部屋に連れ込んでいる母親。

顔見知りだらけの狭苦しいこの町では、まだ子供だった僕の耳にさえ、下品な噂話は聞こえてきた。

そして居場所のなくなった蒼太は、よく家を逃げ出して、僕の部屋に泊まっていた。

だけど最近は昔ほどしゃべらなくなっていて……そういえば学校でも近所でも、あいつの姿を見かけない。

「それじゃ……」

朱里が立ち止って小声で言う。僕たちはいつもの分かれ道まで来ていた。

「また明日ね、真尋」

「……ああ」

小さく手を振って、朱里は僕に背中を向ける。僕は黙ってその姿を見送る。

真っ白なブラウスも、短めのスカートも、濡れた髪も、華奢な体も……何もかもが愛しい。

「あ、朱里！」

僕の声に振り向く朱里。頬がほんのり、夕焼け色に染まっている。「あとで蒼太の家に寄ってみる。ちゃんと学校来いって言うておくから」

朱里が静かに微笑んで、こくんとうなずく。そしてまた背中を向けて去って行く。

僕は朱里のことが好きだった。

いつからかわからないけど、ずっとずっと前から
ことが好きだった。

僕は朱里の

朱里と別れて土手の上をひとり歩く。

子供の頃から歩き慣れた道。僕も朱里も、たぶん蒼太も、このちっぽけな町以外のことは、なにも知らない。

うちの親や周りの大人たちのように、僕たちもこのまま死ぬまで、この場所で暮らし続けていくのだろうか。

なんとなくそんなことを考えながら歩いていたら、土手の下に男と女の人影を見つけた。

「蒼太……」

男のほうは蒼太だった。あんな茶色い頭をしたやつは、この近所ではあいつしかいない。

夕暮れの道端で、僕はぼんやりと立ち尽くす。蒼太は見覚えのある女の人と、キスをしていた。

「あっ」

蒼太から唇を離れた彼女が僕を見る。

ああ、やつぱり……この人は同じ学校の先輩だ。水泳部の仲間が、「すっごく美人な先輩がいる」って騒いでいて、僕も無理やり三年生の教室に連れて行かれたことがあった。

「やだあ、誰か見てる」

はつと我に返って顔をそむけようとしたけど、こちらを振り向いた蒼太と目が合ってしまった。

「なんだ、真尋か」

蒼太は口元をゆるませ、いつものように冷めた顔つきで僕に笑いかける。

「誰？ 知ってる子？」

「おれの幼なじみ」

「ふうん？」

先輩は僕のことを失礼なほどじろじろ見たあと、ふつと息を吐いて蒼太に言った。

「じゃあ、あたし帰るね」

「ああ」

土手を駆け上ってきた先輩は、僕に小さく笑いかけ、学校のほうへ去って行く。

僕は深いため息をついた後、ゆっくりと蒼太に近寄る。

本当は胸がドキドキしていた。テレビや映画以外でキスシーンを見るなんて、生まれて初めてだったから。

けどそんな気持ちを蒼太にさとられたくなくて、僕は平然を装って言った。

「今の……彼女？」

「違う」

「違うって……彼女でもないのに、あんなことするのか？」

「あんなことだけじゃない。家にも泊めてもらった」

言葉を失った僕のことを、蒼太はうつすらと笑っている。

「ヘンな想像するなよ？」

「してねえよ！」

蒼太から顔をそむけて息を整える。蒼太はきつと、こんな僕をバカにしているだろう。

「蒼太。お前、学校さぼっただろ。朱里が心配してたぞ？」

話を変えるようにそう言った。

「へえ、朱里がねえ……」

蒼太は意味ありげな表情で、僕の顔を見る。

「また朱里と一緒にだったんか。お前らのほうこそ、付き合ってるの？」

「付き合ってるんかない」

「けど学校のやつら、みんな言ってるぞ？ 真尋と朱里は付き合ってるって」

「そんなんじゃないって！」

必死に否定したけど、蒼太は全部わかっているはずだ。ニヤリとしてから、ゆっくりと僕に背中を向ける。

「ま、いいんじゃないねえの？ 朱里はいいやつだし。ちょっと口うるさいけどな」

そしてポケットに手をつっこむと、夏草を押しつぶすようにして歩き出す。

「おい、蒼太！ ちょっと待てよ」

「なに？ まだなんか用？」

その口調に一瞬腹が立つたけど、僕は蒼太に言っていた。

「もし、行くところないなら……おれんち来てもいいぞ？」

僕の顔をじつと見てから、蒼太はちょっと笑って一言だけつぶやく。

「大丈夫」

酔っぱらいの父親に殴られても、自分の家に居場所がなくなっても、蒼太は僕の家になくなった。

それは、たぶんきつと あの日からだ。

蒼太は背中を向けたまま、振り返りもせず土手をのぼっていく。

僕はそんな背中から目をそらし、土手とは反対の方向に視線を移す。

目の前に見える大きな川は、今日もゆったりと流れていた。山の向こうに落ちかけた夕陽が、水面を橙色に染めている。

僕はその場に立ち尽くしたまま、右手をぎゅっと握りしめる。

この場所で、僕の兄が命を落としてから、ちょうど五年が経とうとしていた。

僕たちが小学六年生だった夏。あの夏はとても暑い夏だった。

もうすぐ夏休みという学校の帰り道、僕はいつものように三人で歩きながら、蒼太に言った。

「なあ、ちよつと川で遊んでいかないか？」

蒼太が面倒くさそうに僕を見る。

「暑いから、泳いで帰ろうよ」

「このまま？」

「そう。このまま」

僕たちは体育の授業で使ったプールバックを持っていた。

「なに言ってるの？ 子供だけで川に行っちゃダメだって、先生が言ってたでしょ？」

横から口を挟んできたのは朱里だ。今と変わらないショートカットで、肌は真つ黒に日焼けしている。

「いいじゃん、ちよつとだけ。なつ、蒼太？」

「おれ、泳げないもん」

「おれが教えてやる。兄ちゃんに速く泳げるコツ、教えてもらったんだ」

四歳年上の僕の兄は、高校で水泳部に入っていた。その兄に泳ぎを教えてもらったばかりの僕は、それを見せびらかしたくてうずうずしていたのだ。

朱里に 「すごい」 って、言って欲しくて。

「行こうぜ、蒼太」

僕は無理やり蒼太の手をひっぱって、夏草の茂った土手を駆け下りる。

「ちよつと、ふたりとも！ 先生に言いつけるからね！」

文句を言いながら、朱里も僕たちのあとをついてくる。

小さい頃から遊び慣れた川だった。この辺は流れもゆるやかだし、

僕たちが泳げるほどの丁度良い深さもある。

プールバツクから水着を引つ張り出し、さつさと着替えた。気乗りしないような蒼太をうながし、ふたりで水の中に入る。

七月とはいえ、川の水は冷たかった。だけどそんなことよりも、僕は朱里に見て欲しかったんだ。

僕は兄に教えてもらったように泳ぎながら蒼太を呼んだ。

「もっとこっち来いよ」

蒼太は水しぶきをばしゃばしゃ上げて泳いでいる。本当にこいつ下手くそだ。

「真尋、待つて……」

「ほら、もっとこっち」

かすかな優越感に浸りつつ、ちらりと川岸に立っている朱里を見た時、蒼太の体が水の中に沈んだ。

「……蒼太？」

がばつと顔を上げた蒼太は、水中でもがくように手足をばたばたさせている。

溺れてる？ どうして？ 深みにはまったのか？

頭の中が真っ白になる。

「真尋っ！ たすけてっ……」

蒼太の声が水の中に消えていく。朱里の叫び声が遠くで聞こえる。助けなきや……蒼太を助けなきや……だけど精一杯伸ばした僕の手は、蒼太の手には届かない。

「蒼太っ！」

蒼太と同じように水中でもがいた。必死に追いかけるけど、蒼太の体はどんどん遠くに離れて行く。

無理だ……誰か……誰か助けて……。

助けを求めて川岸を見た時、誰かが川に飛び込むのが見えた。

「……兄ちゃん！」

兄が蒼太に向かって真っすぐ泳いでくる。何度もプールで見て、憧れていた兄の泳ぐ姿。

「蒼太っ！ 大丈夫か！」

蒼太の体を兄が引き上げる。

助かった……。朱里が呼んできたのか、川岸に大人たちが集まっている。

ああ、きつと、お母さんに怒られるな……。

そんなことを思った瞬間、僕の目の前で、ふたりの姿が水の中へ消えていった。

「なんだよ？ 話って」

休み時間に僕を廊下に呼び出したのは、隣のクラスの朱里だった。

「ん……ちよつと。誰にも言わないでね？」

困ったように首をかしげて、僕の顔をのぞきこむ朱里。

真っ黒で細くて、男の子みたいだった朱里が、こんな可愛らしいしぐさをするようになったのは、いつからだろう。

「なに？ 早く言えよ」

僕はわざと突き放すような態度で朱里に言う。

「うん……あのね。水泳部の一年生の美穂ちゃん、真尋も知ってるよね？」

「ああ」

朱里のことをいつも追いかけている、人懐っこい後輩だろ。

「あの子にね……蒼太のこと、紹介して欲しいって言われたの」

「え？」

「蒼太と、付き合いたいんだって」

驚いた顔をしてみたけれど、実際そんなにショックではなかった。いつもへらつととしていて、僕のこと友達のこと、冷めたような目つきで見ている蒼太は、どうしてだか女の子にモテる。

彼女でもない人とキスするような、あんないい加減なやつを好きになるなんて……女の子っていうのは、本当にわからない。

「……どうしたらいいと思う？」

朱里が僕の前でぼつりとつぶやく。

「どうしたらって……いいんじゃない？ 紹介してやれば。おれはオススメしないけどな」

朱里は小さくため息をつく、僕から目をそらして窓の外を見つめた。

「そついえば真尋、この前蒼太に会えたの？」

僕は言葉をつまらせる。朱里に、蒼太が河原でしていたことを話したら、どんな顔をするだろう。

「会えなかった」

「……そう」

「とにかくその話は、朱里が決めるよ？ おれは関係ないから」

僕の前で黙り込む朱里。唇をきゅつとかみしめて、少しだけうつむく。

どうしてだよ？ なんでそこで黙るんだよ？

僕はずっと胸の中に押し込めていた気持ちを、朱里に向けて吐き出した。

「もしかして朱里も、蒼太のこと好きなんじゃねえの？」

朱里がはつと顔を上げる。首を振るわけでも、うなづくわけでもなく、ただ呆然としたような表情で僕を見つめる。

「……なんで、そんなこと言うの？」

「いや……なんとなくそう思ったから」

ゆつくりと背中を向ける朱里。

僕たちの脇を、女の子たちが笑いながら通り過ぎる。休み時間はもうすぐ終わる。

「あたしは……」

背中を向けたままの朱里がつぶやく。

「蒼太も真尋も……同じくらい好きだよ？ でも付き合いたいか……そういうんじゃない」

チャイムの音が廊下に響く。朱里が小走り、僕の前から去って

行く。

フラれたのか？ 僕は自分の気持ちを伝える前に、朱里にフラれたのか？

廊下の窓から蒸し暑い風が吹き込んだ。

朱里はスカートをかすかに揺らして、教室の中へ消えていく。

美穂と蒼太が付き合い始めたと聞いたのは、それから少したったことだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4548ba/>

水面に映る空は青く

2012年1月14日11時54分発行